

武蔵野市立男女共同参画推進センター
ヒューマンあい だより

男女共同参画
from
むさしの

Vol.56 2017年 3月

そよ風

Contents

- トピックス(「そよ風」も、センターも、この春に再出発します。)…………… ①
- 講座報告 …………… ②～⑤
- 新着図書案内と各種利用案内 …………… ⑥



ヒューマンあいシンボルマーク

TOPICS

「そよ風」も、センターも、
この春に再出発します。

センター便り「そよ風」が「むさしのヒューマン・ネットワークセンターだより」として創刊されたのは平成11年3月。それからセンター主催の講座を中心に活動の報告を行ってきました。平成21年7月の33号から名称を「そよ風」に変更し、活動報告の他、トピックスでは様々な男女共同参画の課題を取り上げてきました。

一方、市民編集委員と市職員の協働で作っている武蔵野市の男女共同参画情報誌「まなこ」100号を発行するタイミングに合わせて「そよ風」と「まなこ」を一体化することになりました。

「まなこ」は当センターはじめ、市役所・市政センター・図書館・コミセン・駅等市内約450か所に置かれていますので是非お手にとってご覧ください。

「そよ風」の発行はこの号を持って最後になりますが、今後講座等の報告はホームページに掲載します。引き続きご覧くださいませようお願いします。

平成29年度よりセンターの運営について変更点がいくつかあります。

4月1日に施行予定の「武蔵野市男女平等の推進に関する条例」に合わせ、名称が「武蔵野市立男女共同参画推進センター」から「武蔵野市立男女平等推進センター」に変更となります。

女性総合相談は今年1月より庁内とセンターの2か所で行ってきましたが、センター1か所で行うことになり、予約日、予約時間帯も変わります。(最終ページに案内があります)

又、講座の企画をはじめとするセンター業務全般については、男女共同参画を推進する団体メンバー・公募の市民・センターのスタッフからなる企画運営委員会で検討していくことになりました。

女性の活躍、長時間労働の是正、保育園問題など毎日のように男女共同参画に関する話題が聞かれる昨今ですが、まだまだ多くの課題を抱える中、当センターも市民の方々のご意見をいただきながら前進してまいりたいと思います。

どうぞお気軽にセンターにお立ち寄りください。お待ちしております。

センター職員一同

「そよ風」トピックス一覧		12年 41号	女性の貧困	15年 50号	2014年は104位。世界から見る日本の男女平等の現状②
09年 33号	「女性差別撤廃条約」30周年	42号	アサーティブ・トレーニング	51号	“子どもの貧困”を直視する
34号	セクシャル・ハラスメント	43号	産後クライシス	52号	女性活躍推進法は働く女性の味方になるか?
10年 35号	ワーク・ライフ・バランス	13年 44号	夫は外で働き、妻は家庭を守る?	16年 53号	非正規、パートタイムで働く130万円の壁が106万円の壁に!
36号	M字曲線 ー日本女性に特徴的な労働傾向ー	45号	ポジティブ・アクション	54号	センターの移転と愛称・シンボルマーク募集について
37号	メディア・リテラシー	47号	リプロダクティブ・ヘルス/ライツ	55号	センター愛称とシンボルマークについて
11年 38号	男性の育児休業	14年 48号	女性の就業と103万円の壁、130万円の壁		
39号	被災地の女性をとりまく状況	49号	今年は104位。世界から見る日本の男女平等の現状①		
40号	女性と健康				

一票の重み・生活と政治はつながる いま伝えたい 若者と女性へ PTAから政治の道へ 小池順子のメッセージ



○日時 2017年1月28日(土) 13:30~16:00
○会場 武蔵野商工会館 4階 ゼロワンホール
○ファシリテーター 小池 牧子さん(元「まなこ」編集長)

共催：むさしの男女共同参画市民協議会
企画：ひまわりもコスモスも

昨年、公職選挙法が改正され、選挙権年齢が18歳以上となりました。これにより約240万人の若者が新たに有権者となりました。

政治は、他人事ではなく身近なものであり、生活の課題を解決する不可欠な手段であること、一票を行使して選挙をする意味と意義を、今、若い者たちに伝えたい、伝えなければいけないと考え、センターに保管されていたビデオ『PTAから政治の道へ(財)市川房枝記念会理事 小池順子』を使って上映会&トークを企画しました。ところがVHSビデオを上映するための機材が市内のどの施設にもありません。ビデオを制作した武蔵野市の男女共同参画登録団体「ひまわりもコスモスも」のみなさんとこれをDVD化、編集を重ねるなど周到に準備し上映会にこぎつけました。

小池順子さん(明治44年~平成19年)は戦後のまだ貧しい時代、PTA活動の中で荒れた校舎の修理にも「予算がない」という市の対応に疑問を持ち、仲間と勉強を重ね、初めて手にした婦人参政権の一票を、

社会を変えるために行使。また、後に続く女性たちに道を拓くため、自らも当時公選制だった武蔵野市教育委員選挙に立候補し、女性として初めての教育委員に選出された方です。

当日、75名の参加者の中には少数ながら16歳~18歳の男子高校生や13歳の女子中学生もいました。生活と政治がつながっていること、信念と勇気と行動力があれば世の中を変える力になることを、小池順子さんのメッセージから、届けることができたと確信しています。

参加者の声

▶明治の最後に生まれた女性が生きた大正→昭和の重みを感じました。今は豊かで恵まれた時代ではあるが、このような女性たちが扉を開いてくれたことが今を作っているし、課題もまだ残っている。意識をさらに高めていきたい。(40代女性)

▶小池順子さんのお話はメリハリがあり、明快でとても良かったです。今後も多くの人に公開する価値があると思います。(60代以上男性)

取材と書くことのレッスン

~市民の目で、見て、聞いて、書いて~

○日時 2017年2月3日・10日・17日・24日(金) 10:00~12:00
○会場 武蔵野市立男女共同参画推進センター ヒューマンあい会議室
○講師 中村 泰子さん(雑誌「くらしと教育をつなぐWe」編集長)



毎年恒例の「書くことのレッスン」を、今年は新センター会議室で開催しました。男女共同参画の視点も交えつつ、わかりやすい文章の書き方からインタビュー・取材・編集のコツまで幅広い内容でご講義いただき、講師の先生のあたたかいお人柄や丁寧な添削なども相まって、参加者の皆さんには満足いただけようです。来年も開催を予定しています。読者の方でこれはと思う方は是非参加してください。

参加者の声

▶皆さんの文章から学ぶことが多かった。幅広い年代の方のお話が伺えてよかった。書くスキル、人に話をきくスキル以上に得たことが多かった。▶何となく感じていた、書くという作業に対する楽しみややりがいを感じ、高めていただいたように思います。▶中村さんのライフストーリーについても興味をもった。私自身、男女共同参画や、ジェンダー、夫婦の関係などにこだわりをもつタイプであると同時に、不安、悩みもあるので、共感することが多かった。

シングルマザー座談会 ~お金と制度~

共催：子ども家庭支援センター

○日時 2017年2月14日(火) 10:00~12:00
○会場 武蔵野市立男女共同参画推進センター ヒューマンあい会議室
○進行 森岡 千恵子(武蔵野市子ども家庭支援センター 母子・父子自立支援員)



当市で初開催の「シングルマザー座談会」。10人お申し込みがありました。司会役の相談員さんも交え、テーマの「お金と制度」の枠に収まりきれないほど多彩な内容の話が出ました。貴重な意見、情報、そして心のこもったアドバイスを参加の皆さんがお互いに贈り合う場になったこと、そして「これからも定期開催してほしい」という声を複数頂いたことは運営側にとっても本当に嬉しいことでした。

参加者の声

▶市内でもひとり親家庭に向けたイベントがたくさんあればありがたいです。(特にその子どもが自分だけじゃないと思えるような)▶母子家庭の方と話す機会がないのでありがたかったです。▶自分も「ダメもと」で行政に行けばいいなと思うほど皆さんが積極的に行動されているところが印象に残りました。

「ひとり親支援」から見えてくること “誰もが生きやすい社会” へ

○日時 2017年2月11日(土) 10:00~12:00
○会場 武蔵野市立男女共同参画推進センター ヒューマンあい会議室
○講師 赤石 千衣子さん(しんぐるまざあず・ふぉーらむ理事長)



ひとり親家庭について、支援する側とされる側、両方の視点を持ったお話をしてくださったのは、NPO法人「しんぐるまざあず・ふぉーらむ」理事長の赤石さんです。ひとり親当事者であり、かつ、全国的な支援組織を立ち上げ、長年その活動にも携わってこられました。赤石さんならではの、国と自治体、地方と都内をまたがった幅広い見地から、現場感覚あふれるお話が繰り広げられました。

前半は、5人のひとり親のケースを具体的に語って下さることで、ひとり親家庭が抱える「困窮」や「貧困」のリアルな姿が見えてきました。中盤ではひとり親家庭に関する社会のさまざまなデータを紹介。前半

の具体例があったがゆえに、問題の根底にあるもの-日本社会に根強い“男性稼ぎ主システム”の残存-の根深さが腑に落ちました。しかし、こうした政策的なところを変えるには時間がかかるので、やれるところからやっていくということの大切さにも触れられました。

支援者側の共通の悩みとして、当事者の方にアクセスしてもらえるようにするのはどうすればよいか、ということがありますが、様々な立場のすべての支援者が、心したいメッセージもありました。当事者は貧困であると思っていない、そう思われたくないという場合に、支援したいというこちら側の心だけではなく、相手の心に寄り添い、相手の思いを尊重することの大切さです。

この分断社会の中で、“誰もが生きやすい社会”は実現可能なのでしょうか。赤石さんの講座は、“ひとり親支援”というテーマでくくりきれない、誰もが受益者となれるような施策と社会の実現を、国や行政は目指すべきではないかということを考えさせられました。

参加者の声

▶ひとり親への支援は、物心両面のバランスが大切と講師のメッセージが伝わってきた。
▶事例での貧困の現状が印象に残った。
▶当事者には貧困と思っていない、そしてそう言われたくないという思いがあり、その気もちに寄り添うことの大切さ。
▶ひとり親が声を上げる方法がないと常々感じていた。今回の講座でヒントをもらった。

二足のわらじで自己実現！社会的複業のススメ

○日時 2017年2月18日(土) 14:00~16:00
○会場 武蔵野商工会館 4階 市民会議室
○講師 芦沢 壮一さん(スキルノート代表)
○複業実践者 碓氷 美香さん(心のビタミンラボ みかんのカウンセリングルーム代表)



「二足のわらじ」というと現在の仕事の他にもう一つサブの仕事をする「副業」を連想しますが、今回はそれとは違う「複業」を考える企画です。「複業」とは自分にとって本業と同じ価値を持つもの、プラスαの収入のみではなく社会に役立つことを目的とすること、パラレルキャリアとほぼ同様。「複業」は人生100年時代に生きる現代人にとって、これから生きて行くうえで重要な要素であり、すでにブームが来ているといえます。

第1部では二足のわらじ実践者のインタビューと自己分析を行いました。芦沢さんは大手損保会社の社員であり、これまでの配属部署での経験を生かし、自治

体や非営利団体・企業等との連携に関する講座や研修を行っている実践者です。今回は講師として、ファシリテーターとして、日本の「複業」の現状や法的根拠等について参加者の質問に答える形でお話をいただき

ました。もう一人の実践者である碓氷美香さんは、薬剤師として総合病院に勤務しながら、カウンセラーとして地元で活動しています。彼女は「二足目は本来の自分である場」といいます。どの場も大事なので、本業はあえて休みの調整がしやすい非常勤として働いているのだそうです。「二足目があることで人生が充実している」とさわやかに話されました。

第2部では実際に自分がやってみよう、二足のわらじを想定し、名刺づくりのワークショップを行いました。「きのこハンター」「100名山のぼりツアー」等々、参加者同士、たくさんの名刺を交換しながらそれぞれが思い描く二足のわらじを披露しました。もう一つの自分自身や働き方を見直す機会となりました。



参加者の声

▶自分の特性をしっかりと把握して生かすことが大事ということが改めてわかりました。
▶肩書を名乗ってしまうことが第1歩になることが体得できました。
▶少し具体的なイメージが湧きました。もっと若い時に準備しておけばよかった。

小さい子どもを持つお母さんのための講座

共催：むさしの男女共同参画市民協議会

○日時 2017年2月21日・28日・3月7日(火) 10:00~12:00
○会場 武蔵野市立男女共同参画推進センター ヒューマンあい会議室
○講師 荻野 佳代子さん(神奈川大学人間学部教授)
○ファシリテーター 吉田 洋子さん(かながわ女性会議理事長 神奈川大学法学部講師)



むさしのヒューマン・ネットワークセンター時代からの定番講座。今回は応募動機を申込時に書いてもらいました。「漠然とした思いをゆっくと整理する時間が欲しい」「自分と子どもを大切にしたい」「ライフワークバランスをつくる参考にしたい」「自分のイライラの原因を知り、これからの生活や子どもとの時間を楽しいものにしたい」などの思いが寄せられました。

荻野先生からは、心理学の知見とジェンダーの視点で、新しい家族との「人間関係」をつくる時には「違い」を認め合う関係づくりが必要。働き方は、再雇用制度の拡充や在宅勤務の採用などで変わりつつある。また、主婦や母親としてのキャリアを活かし、地域・生活に根差した働き方もある。今感じている“もやもや”は新たな一歩へのシグナルかもしれない。専業主婦のハッピー感が焦燥感に変わったときこそ、勉強できる環境が必要。「他者」とつながることで、身近な人間関係も変わっていく。ゆるやかにつながる人から影響・転機を与えられる場合が多い。この講座に参加したことも大きな一歩と捉えてほしい。人生の

80%は予期しない出来事で作られる。しかし、「偶然」を活かすには心構えが必要で、そのためにも好奇心・持続性・柔軟性・冒険心・楽観性などを磨いてほしいなどのお話がありました。

講義の後はグループワークを行いました。書くことで、一度立ち止まって考える機会を持つため、現在・3年後・7年後・10年後の自分や家族を、働く・学ぶなどのキーワードごとに、ライフキャリアプランをシートに書き入れました。また、ゲストスピーカーの市川さんからは、地域とつながる新しい働き方の提案もあり、多様な働き方があるのだと再認識できました。

最後に、今、自分ができることについて全員が発表し、互いの思いを共有する場にもなりました。今後ゆるやかな関係を築くために、参加者による同窓会を開くことになりました。

参加者の声 ▶グループでの話し合いは様々な意見が聞けて良かったです。▶今あるこの状況をありのままに受け入れる勇気と、少しの自信を与えてくれました。▶自分自身の未来、家族の未来、子どもの未来と多面的に考えることができました。

地元企業の女性と考える

しなやかなワークスタイル ~仕事も家族も自分も大事にしたい~

○日時 2017年3月4日(土) 14:00~16:00
○会場 武蔵野商工会館 ゼロワンホール
○講師 麓 幸子さん(『日経WOMAN』元編集長 日経BP社執行役員)
○パネリスト 池田 奈穂美さん 山本 優夏さん(株)すかいらーく)
安田 まり子さん 神尾 圭子さん(横河電気(株))

共催：(株)すかいらーく 横河電気(株)
後援：厚生労働省



これからの働き方、それも“質”にこだわった働き方が議論されるようになってきた昨今。厚生労働省の後援を頂き、『日経WOMAN』の生みの親であり市内在住の麓幸子さん(日経BP役員)、そして同じく市内の2つの企業の女性社員のみなさんをお招きして、“自分らしいワークスタイル”を考えるイベントを行いました。会場には、就活中の学生さんから子育て世代、50代、60代の方まで幅広い年代が集まり、働き方を考えることは今、世代を超えた関心事であることを実感させられました。



第1部は麓さんによる講演「ハッピーキャリアの法則」。麓さんのユーモアあふれるお話には、すべての年代の方々がはっとさせられ、また勇気づけられるよ

うなメッセージがありました。

第2部は地元企業で働く4人の女性による座談会。ファシリテーター麓さんの質問で、みなさんそれぞれの“働くこと”のリアルな姿があぶりだされました。

結局、“働き方”(しかも家族や自分を大事にしながら)や、“働き続けること”に正解の姿はないのですが、皆さんそれぞれが個性あふれる考え方や理想の実現のための小さな工夫を積み重ねておられました。そしてそれが生活の充実や、働くことの喜びなのだと実感することができました。

参加されたみなさんの反響も大変よく、次回シリーズを期待する声も頂きました。

参加者の声 ▶ハッピーキャリアの4つの法則、明日から実行できそうです。▶女性は74歳、男性は71歳の健康寿命までに社会に貢献する人生の組み立ては高齢化社会で参考になります。▶失敗や困難は自分を成長させてくれるチャンスであることを働く人から聞くことができ私もこの様に働きたいと思いました。

働く母親が安心して住める社会とは…

「待機児童問題」から“女性の貧困”を考える

○日時 2017年2月25日(土) 13:00~17:00

○会場 武蔵野商工会館 4階 ゼロワンホール

○講師 猪熊 弘子さん(ジャーナリスト・東京都市大学客員准教授)

共催：むさしの
男女共同参画市民協議会



保育ジャーナリストとして第一線でご活躍の猪熊さんに、何故「女性は貧困に陥るのか」を「待機児童問題」の視点で捉えて、「子ども・子育て新制度の仕組み」や「女性の仕事と言われているが故の保育・看護・介護の待遇の悪さ」(ジェンダー問題)「子供自身が適度な居場所を与えられる権利を持つ、ドイツ、フランスの例」など、多岐にわたって問題の核心に迫っていただきました。特に「保育を受けられる子どもの権利」については、グループごとの話し合いからも衝撃的だったことが伺われ、熱心な質問が出ました。

参加者の声

▶待機児童解消の鍵が、就学前教育の概念導入(子どもの権利)という視点が、衝撃的(女性)▶保育所を増やせば解決とは言えない、男性の育児への参加、社会全体が変わるべき。(女性)▶国民の一生を通じた教育を考えていない日本とヨーロッパ各国との違いにショック(女性)▶貧困の傘一社会的な「傘」としての「保育園」の存在、社会制度として確立していく必要性を痛感。(男性)

地域と、暮らしと、

ハタラクカイギ 2017

○日時 2017年3月5日(日) 10:30~12:00

○会場 武蔵野プレイス 4階 フォーラム

○企画・コーディネイト 北池 智一郎さん((株)タウンキッチン代表取締役)

○ゲスト 吉田 麻里子さん(くらしの表現家) 中田 よしこさん(パンイチ!主宰・中田ベーカリー店主)

小崎 奈央子さん((株)けやき出版代表取締役)

共催：生活経済課
高齢者支援課
子ども政策課



働き方を見直すことに関心が集まっているなか、子育てしながら多摩地域をフィールドに活躍されているゲスト3人を招き、自分らしい働き方を考えるトークイベントを開催しました。家庭と仕事の関係性、夫婦の役割分担、地域とのかかわり、出産・子育てとキャリアなどをテーマに、ゲストが3点ずつ持ち寄った「働くうえで大切にしているキーワード」の中から参加者の気になるキーワードにお答えするマンダラトークを展開。“まずは行動する。



何となくやるのではなく、きちんとシミュレーションし覚悟を決めて行動する”など、さまざまなトークが繰り広げられ、これからの「はたらく」についていろいろな側面から考える場になりました。

参加者の声

▶起業する方の考え方、生き方をリアルに聞くことができワクワクしました。私も楽しもうと思えた。▶全国的にも起業を応援する事業が増えているので面白い講演内容だったと思います。▶自分らしい働き方をじっくり考えてみようと思います。普段サラリーマンとしか接する機会がないので、自ら仕事を立ち上げ、頑張っている方の視点やお話を伺うことができ、とても勉強になりました。

自分で描く終末のデザイン ~任意後見制度の使い方~

○日時 2017年3月18日(土) 13:30~15:30

○会場 センター会議室

○講師 谷家 幸子さん(行政書士)

共催：むさしの
男女共同参画市民協議会



まずは自分自身の終末期をイメージするために今の自分、判断能力が低くなり支援が必要になった自分、死を迎える時、その後の事務的処理について、図を描きながらの説明がありました。「成年後見制度」は判断能力の低下に伴い、家庭裁判所が後見人を審判する制度。「任意後見制度」は、本人と後見人候補者が公正証書による契約を結び、判断能力が実際に低下した時点で後見業務を開始する制度だと学びました。

自分らしく生きるためにはまずは自分がどのように生きていきたいのか、認知症になった時にはどんなケアを受けたいのか等を現段階でイメージすること大事です。

具体的な質問が多く寄せられ、この制度の難しさを改めて感じました。自分らしい終末期を過ごすために漫然とその時を迎えるのではなく、準備することの必要性を自覚できた講座でした。

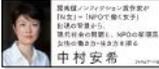
参加者の声

▶私たちが制度を利用し、使いにくさや課題などを出し合うことで、もっと良い制度に育てていきたいと思います。お金の話も伺えて、今と未来がつながりました。▶後見制度は奥が深いと思う。自分がこうありたいとの思いを信頼している後見人に託せたら、現在の生活もより充実したものになると思う。終末期だけが独立したのではなく、つながっていると再認識しました。

N女の研究

中村 安希 著 (フィルムアート社)

N女の研究



「N女」という聞きなれない言葉、NPO法人や社会的企業で働く女子（概して高学歴・高職歴）を指しています。決して高収入を得られない職場に敢えて飛び込む女性たちを支える、働き方の新しい価値観とは？ 9人の「N女」たちそれぞれのプロフィールから、現代社会の問題とソーシャルセクターの可能性が浮かび上がる、注目の1冊。

あなたが生きづらいのは「自己嫌悪」のせいである
他人に支配されず、自由に生きる技術

安富 歩 著 (大和出版)



自分に関する悩みの多くは「自己嫌悪」から生まれるのではないのでしょうか。気鋭の東大教授が「自己嫌悪」と徹底的に向き合った考察です。自己嫌悪のループからどうしたら抜けられるのか、自己愛ではなく「自愛」の人にはどうしたらなるのか、自己肯定感を生み出すにはどうすればよいのか…。誰もがうなづける、しかし、目からうろこが落ちるような至言の数々、悩める人に必読です。

裸足で逃げる

沖縄の夜の街の少女たち

上間 陽子 著 (太田出版)



沖縄の風俗業界で仕事をする女性たちの生活の記録。丹念に時間をかけた調査と会話をひろった記録は、圧倒的な説得力と切実さをもって迫ってきます。暴力を受け、文字通り「裸足で逃げ」ては戻り、また逃げては戻る未成年の少女たちを生み出す街。そこに孕まれる問題に目をつぶり続ける人への強烈な一撃。

『裸足で逃げる』(C)上間陽子/太田出版



『逃げるは恥だが役に立つ』①

～⑧、国内外のジェンダー研究機関表彰の受賞作品、『なのはな』(萩尾望都)、『大奥』①～⑬(よしもとふみ)に加え、今月は『親の介護、始めました。』上、下巻(ぶんか社)も仲間入り。

ちょっと重めのテーマを読みやすく、そして読みだすと止まらない！と人気のコミックコーナーです。

●他にもこんな新着図書があります！↓

イギリス女性参政権運動とプロパガンダ エドワード朝の視覚的表象と女性像	佐藤 蘭香	彩流社	2017
LGBTってなんだろう？ 一からだの性・こころの性・好きになる性ー	薬師 実芳 ほか	東京 合同出版	2014
親の介護、はじめました。(上・下巻 コミック)	堀田 あきお 堀田 かよ	ぶんか社	2016
加害者は変わるか？DVと虐待を見つめながら	信田 さよ子	筑摩書房	2008
「家族する」男性たち 大人の発達とジェンダー規範からの脱却	大野 祥子	東京大学出版会	2016
結婚と家族のこれから 共働き社会の限界	筒井 淳也	光文社新書	2016
キャスターという仕事	国谷 裕子	岩波書店	2017
これで解決。働くママが必ず悩む36のこと	毛利 優子	日本実業出版社	2015
サバイバー 池袋の路上から生還した人身取引被害者	マルセラ ロアイサ	ころから	2016
13歳、「私」をなくした私 性暴力と生きることのリアル	山本 潤	朝日新聞出版	2017
女子をこじらせて	雨宮 まみ(解説 上野 千鶴子)	幻冬舎文庫	2015
テヘランでロリータを読む	アーサル ナフィーシー	白水社	2006
不寛容の本質 なぜ若者を理解できないのか、なぜ年長者を許せないのか	西田 亮介	経済界新書	2017
ルポ 児童相談所 一時保護所から考える子ども支援	慎 泰俊	ちくま新書	2017
ルポ 保健室 子どもの貧困・虐待・性のリアル	秋山 千佳	朝日新聞出版	2016

女性総合相談の場所と日時が変わります。

■市役所7階で実施している女性総合相談は、4月より男女共同参画推進センターで行います。それに伴い、相談日が下記のとおり変更となります。

- 第1土曜日 (13:00～ 14:00～ 15:00～)
- 第2金曜日 (9:00～ 10:00～ 11:00～)
- 第3月曜日 (19:00～ 20:00～)
- 第4火曜日 (13:00～ 14:00～ 15:00～)

無料

秘密
厳守

1回50分、面談または電話、予約制

■相談は、女性の専門相談員と相談室での面談または電話(どちらも予約制)で行います。お気軽にご相談ください。

■予約・問い合わせ
武蔵野市立男女共同参画推進センター (市民会館1階)
☎ 0422-37-3410

● センター利用案内 ●

開館時間：9:00～22:00
休館日：木曜日・年末年始
会議室利用時間：《午前》9:00～12:00
《午後》13:30～17:00
《夜間》18:00～22:00

●会議室は有料・予約制(詳細はお問い合わせください)●

●交流コーナーはどなたでもご利用いただけます●

● 発行 ●

武蔵野市立男女共同参画推進センター ヒューマンあい
武蔵野市境 2-3-7 市民会館1階
電話：0422-37-3410 FAX：0422-38-6239
E-mail：danjo@city.musashino.lg.jp

ご存知ですか。『まなこ』

武蔵野市の男女共同参画の情報誌です。No.99が発行されました。今回のテーマは「女性・多様な視点からの防災」です。当センターをはじめ市役所、市政センター、図書館、コミセン、市内3駅等約450か所に置かれています。是非手に取ってご覧ください。